



出席者略歴

おがた・つとむ 一九二〇年生まゐる。東京文理科大学卒業。中近世文学専攻。現在東京教育大学教授。主要著書は『松尾芭蕉』『蕪村自筆句帳』（以上筑摩書房）『座の文学』（角川書店）など。

なか・たろう 一九二三年生まゐる。東京大学国文学科卒業。現在玉川大学教授、法政大学講師。主要著書は『音楽』『那珂太郎詩集』（以上思潮社）『はかた』（青土社）『萩原朔太郎その他』（小沢書店）など。

ほり・のぶ お 一九三三年生まゐる。東京大学、同大学院博士課程修了。現在神戸大学助教授。主要著書は『芭蕉集』（集英社・共著）『松尾芭蕉集』（小学館・共著）『俳句のすすめ』（有斐閣・共編）など。

とやま・しげひこ 一九二三年生まゐる。東京文理科大学英文科卒業。現在お茶の水女子大学教授。文学博士。『修辭的殘像』『近代読者論』（以上みすず書房）『ことばの習俗』（三省堂）『読者の世界』（角川書店）など。

ひらい・てるとし 一九三一年生まゐる。東京大学、同大学院比較文学修士課程修了。現在青山学院女子短期大学教授。主要著書は『エウアの家族』『言語論』（以上思潮社）『猫町』『白の芸術』『俳句沈黙の塔』（以上水田書房）など。

やまもと・けんきち 一九〇七年生まゐる。本名石橋貞吉。慶応義塾大学卒業。主要著書は『古典と現代文学』『芭蕉―その鑑賞と批評』（以上新潮社）『行きて帰る』『芭蕉全発句』（以上河出書房）『歌仙の世界』（角川書店）『芭蕉の本』5など。芸術院会員。現在明治大学教授。日本文芸家協会会長。

司会者の諒解により検印を省略します

515

シンポジウム日本文学8

芭蕉

昭和51年5月1日 初刷印刷
昭和51年5月10日 初刷発行

司会者 尾形 侑
発行者 鶴岡 隆巳

発行所 株式会社 學生社

東京都千代田区麹町局区内九段南2-2-4
電話 03(263)2611・振替・東京1-18870番
編集担当 土屋晃三

落丁・乱丁本はおとりかえします
Printed in Japan

『シンボリック』日本文学

8



芭蕉

出典

尾形仿

著

那珂太郎 堀信夫

外山滋比古

平井照敏

山本健吉

出席者

尾形 功（司会）

那珂 太郎

堀 信夫

外山 滋比古（第二章ゲスト）

平井 照敏（第二章ゲスト）

山本 健吉（第三章ゲスト）

装幀

杉浦 康平＋鈴木 一誌

『シンポジウム』日本文学——芭蕉・目次

第一章 俳諧とは何か

《報告》 那珂 太郎
《ゲスト》 外山 滋比古

全体のねらい……………二

1 俳諧性について……………一四

「俳諧」の原義……………一五

連歌と俳諧……………一九

山本健吉氏の「挨拶・滑稽・即興」の説をめぐって……………二三

古典と近代読者とのずれ——地霊・ことばの聴覚的要素など……………二六

即興性・短詩型の問題……………二七

2 「笑い」の問題……………四一

文学における「笑い」……………四二

ヒューマール、ウィット、アイロニー、サタイアと「俳諧」との関連……………四四

ことばの遊びから内面化へ……………四五

イン・ドアの笑い……………四六

蕉門と雑俳……………四七

俳諧の生き方と芭蕉の到達点……………四八

「新しき」の要請……………四九

3	ことばの問題	七
---	--------	---

	作品享受における歴史主義と反歴史主義——コンテキストの問題	七一
	「田一枚植ゑて立去る柳かな」をめぐる	七六
	連句と発句——地発句の問題	八四
	発句のリズム構造について	八七

第二章 座の文学

〈報告〉 堀 信 夫
 〈ゲスト〉 平井 照 敏

1	何故に「座」を問題にするか	九
---	---------------	---

	曖昧の美学	九
	言語過程説と座	九
	解釈の多様性はどこまで許されるか	一〇
	作者と座	一四

2	座の構造	一七
---	------	----

	共時的座と通時的座	二〇
	西欧文学と座	二一

3

蕉門の座の形成と展開

現代俳句結社・詩壇と蕉門の座	二二五
貞門の座・談林の座・蕉門の座	二二六
それぞれの座と表現	二二九
地域性と座	三三

4

「座の文学」における作品とは何か

・紀行文と座	一四四
『おくのほそ道』	一四四
『おくのほそ道』と座	一四六
俳文	一五一
「幻住庵記」	一五五
地霊との交響	一五五

5 俳句・連句と近代文学・ヨーロッパ文学との対比……………一五

発句と連句……………一六

連句の可能性……………一七

第三章 芭蕉の俳諧理念

《報告》 尾形 功
《ゲスト》 山本 健吉

1 芭蕉の俳諧理念……………一七

理念と構造……………一八

不易流行論の再検討——蕉風の展開相に即して……………一九

土芳の説と去來の説——理念と史論……………二〇

さび・しおり・ほそみ……………二一

中世の継承と生命的なものへの志向……………二二

造化随順——朱子学と仏教……………二三

かるみの声調……………二四

即興とかるみ……………二五

精神の自在さと興……………二六

かるみは最高の境地か——日本の芸術と西欧の芸術……………二七

・旅とかるみ……………二八

2 芭蕉の文学史的位置づけ……………一九

座の芸能——造形の断念……………	二〇
芭蕉の近世性——西鶴・近松と芭蕉……………	二〇三
、詩人としての系譜——『新古今』と『古今』……………	二一〇

3 今後の芭蕉研究の課題と展望……………二四

、詩人の眼から見て……………	二四
蕉村から照らし直す……………	二七
蕉門研究の推進を……………	二九
、比較文学——特に中国との……………	三三
、時代に即して——たとえば西行受容の場合……………	三四
むすび……………	三五

あとがき……………三七

注・解説……………三九

芭蕉略年譜……………三六

参考文献……………三九

索引……………四四

芭

蕉

第一章 俳諧とは何か

△報告△ 那珂 太郎

△ゲスト△ 外山 滋比古

全体のねらい

尾形 今日のテーマにはいる前に、まずこの「芭蕉」という巻のねらいについて申しあげておきたいんですが、前に、「俳句」という雑誌の昭和四十五年六月号に、「芭蕉学の曲がりかど」という文章を書いたことがあるんです。——それは『校本芭蕉全集』の刊行が終わって、その次に『芭蕉の本』というのが企画された、ちょうどそういう時点で、『芭蕉の本』のPRを兼ねた文章として書いたものなんですが、——そこで「芭蕉学」ということばを使っただけですけども、「芭蕉学」というようなことばを使い始めたのは、たぶん荻野清氏だったかと思います。何という雑誌にそのことを書かれたのか、ちょっと失念してしまっただけで、荻野さんがどういう意味合いから「芭蕉学」ということばを使われたかは今はっきりしないんですけども、私なりに勝手に勝手に付度してみますと、「万葉学」といったことばに対応するものとして「芭蕉学」ということばが使われるとすれば、それは基礎的な資料調査が非常に精緻に進んでいるということがまず一つあげられるんじゃないかと思います。ご承知のように、芭蕉の残した仕事は非常に大きい広がりを持っていて、発句、連句、俳文、紀行文、俳論というふうなジャンルがありますけれども、それらを含めたテキスト・クリティックが、総合的、あるいは体系的に進んできているということがいえる。つまり、以前ですと、発句だけ非常に研究が進んでい



杉風筆 芭蕉像 (蔵本莊五郎氏蔵)

う意味合いを持っている。そのような意味合いをもこめて、「芭蕉学」ということが使われたんではないだろうかと考えてみたわけです。

ところで、従来の研究というのは、実証的なテキスト・クリティックの面では非常に細緻に進んできているわけですが、それでも、それを文学としてどう扱うかということになると、かなり手薄であったといわなければなりません。『校本芭蕉全集』が刊行された時点で、そうした体系的、総合的な資料研究を踏まえて、新しい文学研究が発見しなければいけないというふうにそのとき考え、「曲がり角」というようなことをいってみたわけで、つまり、これからは、その新しい研究を通して、長い間の芭蕉に対する通念を打破する、そういう姿勢を持つことが必要なんじゃないかと思ったわけです。

て、あとは少し片ちゃんばのかっこうで置き忘られていたということがあったわけですが、『校本芭蕉全集』が出た段階では、そういうものが総合的、体系的に一応整備されたということが一つあると思います。

もう一つは、芭蕉の研究というのは、シェイクスピア学に相当する意味で、文学研究における各種の方法や分野を包含しているといえる。つまり芭蕉の研究は、多様な方法によって行なわれ、そして各種の研究分野を包含していて、いってみれば、文学研究のさまざまな原型が芭蕉研究において見られるという意味合いもここにはあるだろうと思います。

それと同時に、ヨーロッパの人々の目から見た場合に、俳諧というものは日本文化の一つのヘソみたいに考えられている。芭蕉を研究するということが、日本の精神伝統の典型を明らかにするとい

長い間の通念というのは何かと申しますと、その一つは、芭蕉を神聖視するということ。これは江戸時代以来引き続いてきている通念だと思えますが、芭蕉の作品であれば何でも偉いものというふうに事大視して、没批評的に取り扱う態度があると思います。また、方法についていえば、子規以来の写生という基準、あるいは自然主義文学における実感という尺度から芭蕉の文学をはかっていこうというこれまでの方法も、この際乗り越えていく必要があるんじゃないかということ。もう一つは、芭蕉の研究というと、これまで発句に中心が置かれてきたわけなんです、そうした片寄った視点からもっと自由に踏み出したところで、俳諧というのはいったいいかなる文芸なのかということに対して、新しい照明を当てる必要があるだろうと思うのです。

それについて、国文学者の研究は、資料研究のワクをいくらも踏み出せない、つまり、何か新しい資料が一つ発見されると、それによって、わずかに半歩、あるいは一步研究を進めるという形にとどまって、それ以外の違った角度からとらえようという姿勢をなかなか持つことができないでいます。次回に参加が予定されている平井照敏さんが今度お出しになりました『俳句沈黙の塔』という書物の中でも、芭蕉に関するこれからの新しい研究は、国文学者の畑よりもむしろ詩人、実作者のほうに期待されるということがありましたけれども、まさにそのとおりだと思うんです。それでこの際、この巻では、外国文学を研究していらいっしやる方や、あるいは実作にかかわっていらいっしやる方に参加していただいて、「芭蕉」という存在を相対化していく、そして新しい視点を持てるようにしたい。あるいはまた芭蕉を研究するということを、単なる過去の一つの事象を究明するいうだけにとどめず、そこから一つの新しい創造への可能性をさぐり出したいというようなことをこの巻のねらいにしたわけでございます。そこで司会者陣にも詩人の那珂太郎さんに参加していただきまし、きょうはまた英文学者の外山滋比古さんに参加していただいているというわけでございますので、その辺のところをおくみ取りいただいて、ご自由にご発言をお願いしたいと思うわけです。以上は、この巻のねらいについての話です。

では、今回は何を問題とするかということについて那珂さんからお願ひします。

1 俳諧性について

那珂 今日「俳諧とは何か」という題目でお話をさせていただくことになっていますが、ぼくはむしろ質問役です。

1 俳諧性について

2 「笑い」の問題

3 ことばの問題

という三つの大きな項目を立てて、これにそってご自由に話題をすすめていただければかかと考えています。ここで問題にしたいのはむしろ芭蕉という詩人なんですが、彼がたずさわったのは俳諧という一種独特な文芸形式でありますので、この俳諧とは何かということを考えていくことによって、芭蕉を照らし出すことができたというのが趣旨なのです。

あとの項目については、その話に入ります前にそのつど申し上げたいと思いますが、まずはじめの俳諧性について——いうまでもなく俳諧は俳諧の連歌としておこったもので、連歌はもとひとつの座にたつらなる者が互いに酬和するというかたちのもので、俳諧もまた、「座の文芸」ということがまず基本的性格としてあげられます。しかしこの点については、次回の中心題目として予定されていますので、そのことをお含みおきいただきたいのですが、いま、俳諧性について考えようとするとき、だいたい二通りの行き方があるといっていると思います。一つは歴史的考察といふべきもの、その起源をさぐって発生的に見るという行き方、もう一つは俳諧の文芸としての特質を、理念的にたしかめようという行き方で、これもその時代時代によってうごいて必ずしも一様ではありませんから、歴史的考察と切り離せないものでしょうけれども……。

そこで、まず発生的にみますと、俳諧ということばは、古くは『古今集』に俳諧歌があつて——いや『万葉集』に

はどうでしょう。

尾形 『万葉集』には俳諧ということばは出ていませんね。

那珂 『古今集』で初めて俳諧歌ということばが出るわけですね。

その俳諧ということばの意味について、これは堀さんがいろんな論文でお書きになっていますので、その点を簡単に話していただけますか。

「俳諧」の原義

堀 古いところでは、『漢書』に「俳諧者滑稽也」という解釈があり、唐の司馬貞が『史記』に注釈をつけた「史記索隱」にも「俳諧猶滑稽也」という説明があります。また辞書的解釈としては中国の古辞書『說文解字』に「俳、戯也」とあり、『爾雅』に「諧、和也」とあります。日本では平安時代の末に清輔が『奥儀抄』の中にこれらの解釈を引用して、彼の俳諧釈義を行っていますが、清輔は、その中で「俳諧は滑稽である」をさらに敷衍して、「滑稽というのは、道に非ずして道をなす。俳諧というのは、王道に非ずして妙義を述べる」ということなだと説いています。これは、俳諧を積極的に評価しようとする日本の最初のすばらしい考え方だということを栗山理一さんが『俳諧史』（塙書房）の中で指摘されたわけで、私は単にそれを受け売りしているにすぎません。

ですから、基本としては「俳諧は滑稽なり」という、ことになりましょうか。俳諧・滑稽がどういう文学的現象として起こったかということは、連歌史や俳諧史に即してもうすでにかなり研究されているんだけど、その俳諧史上の個々の現象を貫く俳諧固有の基本的条件が何かあるのだろうか、ないだろうか。あるとするなら何だろうということはあまり究明されていないようです。ついこの前、栗山理一さんはその条件を、意外性⁽²⁾ということととらえられたんですけれども、私は、それを「道に非ずしてしかも道をなす」とか「王道に非ずしてしかも妙義を述べる」という悖理ない